

第2回全国同人雑誌賞 発表

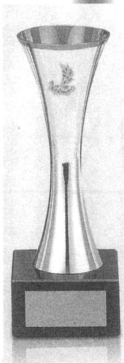
二〇二一年四月に発足した全国同人雑誌協会主催により、全国の同人雑誌の文芸活動を称揚、奨励する目的で、全国同人雑誌賞が新設されました。これはすでに六回で終了した徳島県三好市の富士正晴同人雑誌賞を継承するものであると同時に、日本文学の基盤である同人雑誌の創作と表現活動に光を当て、文芸創造エネルギーを鼓舞し、自主表現を喚起奨励するために設けられた賞です。

このたび第二回全国同人雑誌賞の選考が四月十六日に、選考委員横尾和博氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の二名により、東京「ハドルスペース自由が丘」にて行なわれました。ここに謹んで選考結果を左記の通りに発表させていただきます。

なお、授賞式は七月二十九日にリーガロイヤルホテル大阪で開催される第五回全国同人雑誌会議・第二回全国同人雑誌協会総会場で、行なわれます。全国の同人雑誌諸氏は奮って御参加ください。

全国同人雑誌協会

大賞



奨励賞

「AMAZON」(兵庫県)

編集人代表 権野宏子

「季刊作家」(愛知県)

主宰 祖父江次郎

「婦人文芸」(東京都)

主宰 都築洋子

特別賞

「樹林」(大阪府)

主宰 大阪文学学校

「季刊遠近」(神奈川県)

主宰 小松原蘭

ニューウェーブ
新同人雑誌賞

「mon」(大阪府)

代表 飯田未和

「弦」(愛知県)

代表 中村賢三

「茶話歴談」(大阪府)

編集長 丹羽志朗

選評

文学の力

横尾和博

このたび全国同人雑誌大賞の選考を担当させていただくことになった。私のような若輩がおがましいのだが、勝又浩さんのお誘いもあり、引き受けた。同人雑誌の役割は文学の裾野を広げることである。近現代文学はいま行き詰まり、情報機器全盛で活字文化が停滞し、文学書を読む人も減っている。同人雑誌も高齢化が進むが、文学に触れる貴重な場を提供する基本的な任務は重要だ。今回の賞の基準は「作品の質の高さ」「継続性」「裾野を広げ外部に開かれていること」に置き、私は選考を進めた。

大賞の「AMAZON」は一九六二年の発刊。神戸の「VIKING」同様長い歴史があり、作品の質も確保されており、関西と東京で例会や合評会が開かれている。大賞にふさわしい。継続は力であるが、継続を重視するあまり内容の薄い誌になってしまう。同人雑誌本来の役割である「文学への志」が疎かになる。「AMAZON」には見習うべきことが多い。

マール文学賞の受賞者が出ており、今後への期待は大大。

歴史は浅いが時代・歴史小説に特化した「茶話歴談」。

その選択に一票である。歴史ものは読者層を広げやすく、この誌も今後に期待できる。

文学が私たちから遠ざかる。だが人間が存在する限り文学は必須である。困難な状況の下で、同人雑誌を活性化させるためには内に閉ざさず外部に出ること。同人雑誌同士の交流や情報交換、文学フリマへの参加、組織論に陥らない運営、古今東西の文学の読書会開催など創意工夫が必要だ。「文学が好き、生きるよすがだ」という強いモチベーション。

新メディア時代の中の同人雑誌

五十嵐 勉

「全国同人雑誌大賞」の第二回目は、スタート時に定めた基準を確認しつつ、あらためて全国の同人雑誌を俯瞰する機会となった。当初確認したのは、①「いかに継続しているか」②「内容が充実しているか」の二点に加えて、③「現在も、合評会などいかに錬磨の場として機能しているか」を基準にすることだったが、それに沿って見ると、多くの候補が挙がってきた。

特に関西地域で伝統誌のいくつかに基準を満たす注目す

特別賞の「樹林」は大阪文学学校の誌だ。同校は周知の通り昭和一九五四年に開校し、各賞の受賞者を輩出している。多くの受講生は同人雑誌を発行し、今や同人雑誌業界全体の活性化を牽引している。その功績は誠に大である。編集者が若返り活気ができた特別賞の「季刊遠近」。

作品の質が高く持続し、また新同人も増えていると聞く。同人個々の力と併せて、誌に対する同人の思い入れの強さだと感じる。今回各賞受賞の各誌も同様だが、思いが凝縮され、それが行間に溢れるような雑誌である。

一九六五年創刊の「弦」。毎月読書会開催し外に開かれ、小説、エッセイ、詩、評論など内容も豊富で、特別賞。奨励賞の「八月の群れ」も質の高い作品を毎月発表。大阪の朝日カルチャーセンターを母体に一九八一年に発足し、実績もあり熱量も豊富で今後の期待も大きい。

「季刊作家」は一〇〇号を超えた。同誌の前身は戦後芥川賞作家の小谷剛によつて創刊された「作家」。一九九二年に「作家」を継承し、現在に至っている。編集内容や構成に秀でており受賞に異議はない。

「婦人文芸」も一九五六年創刊。戦前、神近市子が発行していた誌の名前を継承。実力派が揃い、神近の意思に沿う。新同人雑誌賞「non」は三〇代、四〇代の若い同人が多く、まだ二〇号だが文学にかける熱量と外部に開かれた姿勢を高く評価した。同人からは「三田文学」新人賞や神戸エル

シオンを持ち、活動が続けてほしい。



横尾和博

よこお かずひろ

1950年東京生まれ
文芸評論家・放送作家・NHK学園自分史講座・文章教室講師
著書『新宿小説論』ほか
テレビ制作番組『武田鉄矢の週刊鉄学』ほか。東京新聞、中日新聞、北海道新聞、時事通信社（全国の地方紙配信）で書評を担当中

べき誌があり、選考は難航した。「VIKING」「樹林」「AMAZON」の三誌が最有力候補として残ったが、伝統的な同人雑誌として富士正晴が戦後長く牽引し、東の「芸首都」と並んで西の雄として関西から多くの作家を輩出した「VIKING」が筆頭に挙がったが、現在閉鎖的になっており、合評会も奮わないという点で、見送られた。また大阪文学学校の機関誌として長く発行されている「樹林」は、その機関誌としての一面を自ら差し引き、遠慮する形を示した。私は、長谷川龍生氏が主導してきた頃の、「学校」を超えた表現活動を高く評価し、複数の大賞受賞でもいいと思っていたが、その姿勢を受け入れざるを得なかった。

「AMAZON」は、二誌に引けを取らない、五月現在五一九号発行の隔月刊である。この多忙な現代において、隔月刊の発行を続けることは至難の業である。この点だけでも高く評価されるが、内容の先鋭性も注目すべきものがあり、その面では、二誌を抜いているとも見られた。朝鮮問題への鋭利な掘削や歴史の新たな発掘と問題提起は、現代の日本へ投げかける、重く、真摯な白刃の光芒を備えている。これは自ら世界へ向けて放たずにはいられない強烈な精神性に基づいているからこそ生まれてくるもので、同人雑誌の最も根本的な「書かずにはいられない」何かが漲っている。ここに、大賞としてふさわしい光を感じた。

特別賞に甘んじた「樹林」については、いくつか付け加えておく必要がある。現在の日本の同人雑誌界で、これほど大きな創造的エネルギーを発し、人的な拡大力、影響力を持つている文学集団はない。一時は井上光晴の「文学伝習所」が各地に文学エネルギーを注いで、熱い渦を巻き起こしており、現在もその余裔が活躍しているが、膨張力は失っている。しかし大阪文学学校は、卒業生が自ら同人雑誌を立ち上げ、新たな拡大増殖力を旺盛に発揮し、同人雑誌界のニューパワーを巻き起こしている。今回新同人雑誌賞を受賞した「mon」「茶話歴談」も、大阪文学学校の卒業生が創刊したものである。二十誌を超える同人雑誌が生まれていることを考えると、いずれ何から別に表彰され

るべき活動意義を有していると思う。ここから商業誌にデビューした作家も多く、現代の日本文芸の潜在的な原動力の一つとなっていることは否定できない。称揚に値する。

関東の「遠近」は、過去に「文学界」同人雑誌批評を担当していた文芸評論家久保田正文の指導を受けていた伝統誌で、長く難波田節子氏が主宰を務めていてその功労も大きい。最近、「まほろば賞」を受賞した小松原蘭氏に交代して、新風をも帯びている気鋭誌である。正統的な立脚点から文学作品を構築しようとする一貫した姿勢に、ひたむきな創造エネルギーが漲り、それが低く染み渡っていく動勢を示している。持続力が、そのまま作品を産み出していく力になっている点が高く評価された。

中部地方は名古屋を起点として同人雑誌パワーが渦巻いている、メッカの一つである。三田村博史氏を中心にここから始まった全国同人雑誌会議が、全国同人雑誌協会の母体となっている。中部ペンクラブには一〇〇を超える会員がおり、その中の有力誌の一つである「弦」は、中村賢三氏によって実直で誠実な表現活動を重ねて現在一一三号に至っている。またここからまほろば賞に取り上げられる作品も多く、内容も安定充実していて、重鎮の風格がある。長年の功績は、賞賛に値すると推挙した。

奨励賞となった「季刊作家」は、同じく愛知県の歴史ある同人誌で、現在一〇一号に至っている。前身は芥川賞作

家の小谷剛が主宰していた「作家」で、その独立気概の精神を受け継いだこの誌は、近年優れた作品を次々に産み出した。津田一孝「送り火の夜」、鈴木友範「光復香港」と

二度まほろば賞当選作を出しているのははじめ、今回も「見返り」(佐藤文平)、「枯野」(祖父江次郎)と優秀作を二作ノミネートさせている。この実績は他に例を見ず、主宰者の労苦と優れた書き手の手腕がうまく溶け合って、読み応えのある内容を続けている。前身の精神を引き継いでいる点と秀作を多く出している実績で、当然の受賞と言える。

東京の「婦人文芸」は、女性だけの同人という特性を持ちながら、その長所を生かして、新鮮な視野で文学領域を展開してきた。いろいろ継続の困難を乗り越えながら一〇〇号を超えたのは、立派である。東京は他の都道府県に比べて横の繋がりが希薄で、独立意識は強いものの、逆に孤立しがちな文学風土がある。現在はインターネットやSNSで新しい繋がりが得られるので、それらを利用しての新たな展開の気配に加えて新領域の匂いもある。それらへの期待を込めて推挙した。

「八月の群れ」は、エルマール文学賞をはじめとする文学活動の盛んな神戸の誌で、ヒューマニズム豊かな、懐の深い編集で地域にふさわしい表現運動を展開している。慌ただしい生活を背負いながらも、人間性を損ねるものへの糾弾の刃は鋭く、その底に深い優しさを湛えて、包容力の大

きな側面を保持している。現在は葉山ほずみ氏が主宰となつて、二〇〇ページを超える充実した誌面を見せている。

新同人雑誌賞の「mon」はすでに二〇号に達する、関西のニューパワーを代表する誌で、代表の飯田未和氏の元に集まった若い世代の書き手には、何か新しい世界での問題に果敢に挑戦する空気が満ちている。水無月うらら、望月なな、眞住居明代などの実力作家を多数抱えて、斬新な機軸がある。さらに新しいものが生まれてきそうな気配の熱い誌面は、新同人雑誌賞にふさわしいものを感じさせた。

「茶話歴談」は誌タイトルが示すように、歴史小説だけに発表のジャンルを絞っている。こういうユニークな同人雑誌は、これまで見たことがなかった。大阪文学学校の卒業生が、純文学の枠に飽き足らず、果敢に打ち出した挑戦は、過去の時間の中に人物や時代の新しい息吹を生動させて、より生き生きと蘇らせている。失われたものに命を吹きこんで躍動させる時代小説の醍醐味を堪能させてくれる新機軸の誌である。新同人雑誌賞として同人諸氏の今後が大きい期待できる。

現在は、メディアの大変革期の渦中にあり、既存のマスメディアが根底からその存在基盤を揺さぶられている。新聞購読者数の激減、「週刊朝日」の終刊に象徴されるような週刊誌の凋落、書店数の半減と、活字文化の危機だけで

なく、テレビもユーチューブや新興チャンネルへの多極化などを通じて、視聴者数も低下し、広告・コマース業界も劣化の嵐に見舞われている。しかしどんなに、時代の嵐に見舞われようと、自らの表現意欲に基づいた同人雑誌というシンプルな表現媒体は、それに大きく左右されることはない。自ら創造し、自ら表現していく基本的な行為は、人間から失われることはない。そしてそれは、走ったり、歩いたり、聞いたり、見たりする行為と同じ、人間の基本的な行為として、育て守つてかなければならない行為である。その自由な思考や自由な想像こそが、未来への何かを生み出せる力に直結している。NHKの大河ドラマもつまらなくなっている。民放テレビもくだらないお笑いに溢れ、真に報道すべきものや、心を動かすドラマが衰退しつつある。これらは文化全体に波及し、人間の真の躍動を遠くしている。この現実には、ストーリーを組み立てる力の貧困化が潜み、人間の問題を深く見つめる力の欠如が横たわっている。だから、同人雑誌が日々苦闘して培っている力は、文化全体の力に大いに関連していることを自覚してほしい。

現代は、インターネットの恐るべき普及によって、既成の「マス」が解体し、個人が一気に世界に躍り出す現実に晒されている。この流れの前では、むしろ同人雑誌による表現は、一気に世界と直結する可能性を帯びている。大手

出版社のホームページは、見知らぬだれそのホームページと並んでいる。検索機能によって、人は瞬時に目的や相手と繋がるができる。そのことは一気にとてつもない普遍性を帯びる可能性を示している。要は何を発信し、何を重視し、何を訴えていくか、その内質にある。個人単位で何を考えるか、何を表現していくかが重要になる時代の中で、むしろ同人雑誌は個人に直結した表現であるがゆえに、より重要な意味を持つ時代趨勢にある。

だから「マス」や「多数」に媚びることなく、それぞれの現実としつかり切り結ぶ、洞察や対決や格闘を大事にしていけばいい。その格闘が同時に普遍性を帯びることになるし、それが共感としてより広がり、大きな力となっていく文学の真の可能性を示している。同人雑誌は、人間の未来と直結した重要な役割を担うものとして、光を得る時代になっている。そのことを自覚してがんばってもらいたい。



五十嵐 勉
いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早大文学部文芸科卒
79「流謫の鳥」で第2回「群像」新人長編小説賞受賞
84-90 タイ・カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著『緑の手紙』（読売新聞、NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞）『鉄の光』（健友館文学賞大賞受賞）など

全国同人雑誌賞

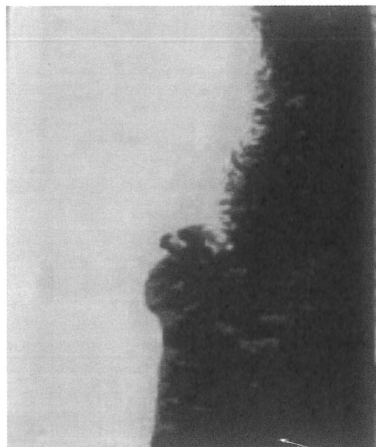
大賞

「AMAZON」

編集人代表 権野宏子

AMAZON

2023.3 No. 518



受賞の言葉 「AMAZON」 編集人代表 権野宏子

「AMAZON」誌の第一号発行から六十年になりました。ちょうどこの年に「全国同人雑誌大賞」を受賞したことを感慨深く嬉しく思います。

第一回の「AMAZON」の会合は、一九六二年五月一七日、尼崎の公民館で開かれました。その頃はみんな若く、詩、小説、随筆、評論、ドキュメント等作品は多岐にわたり、発行は毎月でした。全国でたくさんの同人誌が刊行されていた時代でした。

毎月最後の日曜日に「AMAZON」のために集まり、文学や社会について話すいい時間でした。「AMAZON」という集団があつて「AMAZON誌」を発行したのです。

六十年の間に同人も入れ替わり、発行も隔月になりました。それでも「AMAZON」の発行を続け、合評会を続けているのは、やはり「書く」ことの魅力、「読んでもらう」ことの魅力でしょうか。

最近「AMAZON」は、応募作品が多く、充実してきました。

この時に賞をいただくことは、とても励みになります。



「AMAZON」の流れ

一九六四年五月一七日夕刻、尼崎の小田公民館で開かれたのが第一回の集いである。参加者一六名、大阪文学学校の卒業生と尼崎近辺の文学愛好家たちであった。「AMAZON」の名前の由来は、尼崎ゾーンで会が誕生したこと、南米を滔々と流れるアマゾン川のイメージに託したこと、ギリシャ神話の伝説的女人族、アマゾンのように強くあれかしと願ったこと等々である。

初めは「野間宏を読む会」から始まった。一人の作家を徹底的に読み込むことは創作を心掛ける者にとって必要という考えに基づいていた。三島由紀夫、井上光晴と読み進んだが、ある時から創作中心の会に舵が切り換えられた。

発行人は、松尾亮、綿谷駿次郎、西川正明、射場鐵太郎、権野宏子、そして現在、寺岡洋子が引き継いでいる。また編集に携わったのは、松尾亮、御厨善定、黒野敬三で、その後編集委員数人の当番制になって現在に至っている。

「AMAZON」誌の特徴としては、一つには「例会通信」の欄があることである。「AMAZON」のメンバーが東京周辺と関西に分かれていて、合評会は東京と関西と二カ所で行っている。その両方の講評を載せて、お互いの理解を深めるために設けられた。執筆者にとってはこの欄のお陰で後々まで大いに参考になるから「例会通信」は非常にありがたい。また、関西と東京は年に一度、合同例会を持つようにしている。

もう一つの特徴は、表紙絵である。第六七号から四九九号まで、黒野

が担当した。ほとんどが「書きおろし」と言える。このように直筆である「生の絵」は、「書くこと」についても自分の「なま」を書く楽しさと、「なま」の迫力を伝えてい

と思う。「AMAZON」の読者には、この表紙絵が楽しみだと言う人も少なくない。現在は、黒野の「絵」の弟子で「AMAZON」同人の北川圭子が担当している。雰囲気

が継承されていて「AMAZON」として幸運であった。「文芸誌AMAZON」の作品募集は、まず、「小説・ノンフィクション・随筆・詩など形式は自由」としている。

集まってくる作品は実に多岐にわたる。編集人はこの作品はどのジャンルだろうかと迷うことがよくある。嬉しい悩みだと思っている。型にはまらず自由に書いているのだと思うからである。ただし基本は「文芸」であること。

現在は隔月に発行しているが、作品が多い時もあるし、少なくて発行出来ないかもしれないと、やきもきすることもある。それでもまだ途切れたことはない。AMAZONの底力だと思っている。

作品募集は前の文に続けて「ワープロ原稿、または原稿用紙でお願いします」としている。初期の一九六二年のころの「AMAZON」誌はガリ版刷りである。手刷りであったらうからA5版ではなく、B5版である。

そのうちに活版またはタイプ印刷になっているが、ガリ

版は懐かしい。ガリ切りの労を厭わず、ともかく刷り物にして仲間内で批評し合いたいという気概が感じられる。当然原稿は手書きであつただろう。現在では大抵の執筆者はワープロ原稿で出稿している。編集する人も便利である。しかし、便利さの陰で失ったものがあるのではないかと思う。

こんな記事がある。黒野の編集後記の一部である。

「生前の堀巖さんが、一旦はパソコンのワードで原稿を完成なされてから、もう一度丁寧な楷書で原稿用紙にペン書きされた作品を送ってこられたのを思い出すのである。最終ページの余白には、ご自身の朱印まで押されていて責任の程が示されている。確かに誤字、脱字がない。堀さんの言では、ワードで打ち出したままでは変換間違いに気がつかず素通りしてしまう箇所が必ずあるとのことである。私の編集の経験からも手書き原稿の方が、誤字当て字が少なく認識している」

堀巖はかつての「AMAZON」同人で、東京に「AMAZON」を立ち上げた人だと聞いている。いかにも文士然としていたとも。手書き時代にはなかった変換ミスのことを書いていただけだが、手書きでこそ生まれる文章の感触が失われるのに抵抗して、堀巖がわざわざ手書きで送って来た。それを、長年編集に携わり、丁度手書き原稿がワープロ原稿へ切り替わりつつあるときに遭遇した黒野が警告したのだと思う。「ワープロ」という機械の前で書くことと、

紙に鉛筆で書くこととの「なま」の度合いの差である。しかし、だからと言って、もはや手書き時代には戻ることとはないだろう。だがやはり「基本は手書き」。手書きなら停電でも蠟燭の光で書けるではないか。ワープロだと、停電はおろかコンピューターのフリーズで、もう書けない。だから「AMAZON」の原稿募集は「紙と鉛筆があれば投稿できる」が基本であるとしている。

六〇年という時間の中で、何度か節目の記念号を出した。練っていると、外部で評価された作品もかなりあつて、「AMAZON」同人として誇らしい。一方で追悼号も何度か出さねばならなかった。止むを得ないことではあるうけれども、残念でたまらない。当初からいる同人たちの話から会いたかつたと思ふ。しかし書いたものが残っている。注意深く散逸しないようにしてくれたことに感謝したい。現在、尼崎市立中央図書館にほとんど全巻が収められており、閲覧することが出来る。そのように配慮してくれたのは「AMAZON」の先輩で、初めは御厨、それを受け継いだ黒野である。そして今、私たちに託されている。先日、神戸市立中央図書館でも、郷土資料として保管してもらっていることが分かり、「AMAZON」の地道な活動は、これまた地道な評価を得ているのだと、思いを新たにした次第である。

ところで、同人・会員の大半は高齢になった。そうする

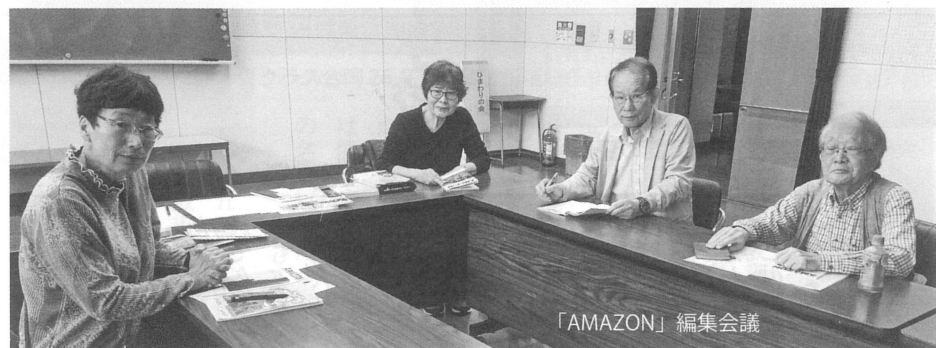
と本が目で読むものとして作られているのが困る事態になつてくる。いやすでにそうなっている。音訳したものがあればどんなにいいだろうと思ふし、現に必要な人もいる。「AMAZON」の裏表紙に「eye love eye」のロゴマークがあるのだが、これは「eye mark」といって、視覚障害などで読むのが困難な人に音声などに直して提供してもよいという印である。いつのころ誰が付けるようにしたのか、先輩の思慮深さに思いを致すが、実際には何もしてこなかった。ようやく今、ボランティア団体をお願いして実現する所である。どのような形で実現できるか試行中である。

話題が変わって恐縮だが、創立メンバー松尾亮さんの最近のエピソードを一つ紹介させていだきたい。

私が松尾さんに初めて会ったのは二〇一七年三月の、尼崎市立北図書館での関西例会だった。前日に名古屋から新幹線で来られて大阪のホテルに泊まり、尼崎市立北図書館で行われる関西例会に参加しておられた。初対面だったが、気さくな話し方で自分のことを「ぼく」と言うのが印象的だった。

松尾さんは今年九〇才。私の周りにいる同年代の人は自分のことを「わし」と言つたり、少々きざつぽく「おれ」とか言う人が多いので、松尾さんの「ぼく」、は万年青年のハイカラさを感じさせた。長身で服装もおしゃれだった。

松尾さんは以前、尼崎に住んでおられたようで、私の住んでいる尼崎の南部、出屋敷界隈のこともよく知っておられた。「出屋敷と言えば、春風堂の本屋はまだあるの？」西難波の春風堂本店はあるが、再開発で出屋敷の店はなくなったこと、私の姉が春風堂の出屋敷店で働いていたことがあると答えると、そこで働いていたNさんや春風堂の主のことを懐かしそうに話し始めた。松尾さんは春風堂書店のよいお得意さんだったようだ。私も学生の頃、春風堂の本店でアルバイトをしたことがあるので、その人たちのことはよく知っていた。尼崎市内に住んでいて、例会に自転車で行ける私から見ると、名古屋から泊りがけで参加する松尾さんは別格の人だった。



「AMAZON」編集会議

の京都の哲学の道あたりのことを書いた作品も読んだことがある。六〇年もの長い間同人であり続け、文章を書き続けるのは大変なエネルギーだと思ふ。「ぼく、眼が悪いから、他の人に『AMAZON』を読んでもらっている」と言っていた。名古屋には点字図書館があり、そこではボランティアが音読もしてくれる。「AMAZON」を愛してやまない松尾さんだったが、その後、高齢のため例会参加は難しくなった。

二〇二二年の夏、「AMAZON」同人の吉留さんと名古屋の松尾さんに会いに行った。近鉄電車の新しい特急「ひのとり」に乗るのも楽しみだった。松尾さんは私たちの訪問をとても喜んでくれ、住まい周辺を散策した後、近所の中華料理店で再会を祝し、昼間から盃を傾けた。客があれば昼間でもビールでもなす松尾さんは、やはりおしゃべりな人だと思つた。

秋に合同例会を名古屋で開催したが、体調思わしくなく出席はかなわなかった。早く快癒されることを祈っている。

(北川珪子記)



昼間部火曜日の2クラス合同26名で『樹林』在校生作品特集号の合評会

一九五四年(昭和29年)に創立された大阪文学学校は七三年にやっと、大阪市開発公社が建てた九階建てビルの三階におよそ一七〇平米の自前のスペースを確保し今に至っている。年三〇〇万一五年払いの返済で大阪市と購入契約を結ぶ際に必要に迫られて設立したが、社団法人(今は頭に「一般」が付く)・大阪文学協会である。その一〇年前、一九六三年八月に『樹林』の前身の『新文学』

『樹林』は、一九七三年三月に設立された一般社団法人・大阪文学協会(現代代表理事/葉山郁生)が発行している。大阪文学協会の定款にあげられている執行すべき事業の①は文学講座の開催、つまり大阪文学学校(現校長/細見和之)の運営である。②は文学雑誌の発行、つまり『樹林』を出すことである。以下、③小説・詩・児童文学・評論などの書籍の出版、④文学集会・講演会の開催、⑤文学賞の実施、⑥その他、となっている。③は今では休止しているが、④の文学集会は在校生たちの自主組織である学生委員会が企画し、学園祭のノリで各クラスから十数の模擬店を出してもらって年末におこなっているし、講演会は東京などから著名な作家・詩人などを招き協会・学校主催で最低でも年二回は催している。⑤は朝日新聞社の全国共催を得て、学校の初代校長の名を冠した小野十三郎賞を二五年間継続している。

大阪文学学校の「樹林」



大阪文学学校発行の月刊誌の変遷

全国同人雑誌賞

特別賞

「樹林」

主宰 大阪文学学校

受賞の言葉「樹林」 大阪文学学校 細見和之

このたびは、全国同人雑誌賞の特別賞を授与いただき、たいへんありがとうございます。「文学の衰退」が言われて久しいものがありますが、日本の文学の屋台骨をいまでも支えているのは、各同人が身銭を切って刊行している同人誌だと思っています。「樹林」は大阪文学学校の機関誌の役割も果たしており、生徒の作品、チューター(講師)の作品を中心に掲載してきましたが、さまざまな同人雑誌評でも採りあげていただきました。コロナ禍とロシアのウクライナ侵攻が続くなか、批評性をもった文学がいまこそ必要であって、この状況のなかでこそ書かれねばならない文学が現に全国の同人誌の仲間によって紡がれているものと思います。そんななか、商業誌とあつた志のもと刊行されている同人誌そのものを対象とした賞はまことに貴重であつて、その特別賞に選んでいただきましたことをまことに光榮に存じます。今後ともこの特別賞に値する誌面となりますよう研鑽を重ねてゆきます。

が産声をあげている。もちろん、それ以前に学校機関誌や在校生文集は、何十冊も刊行されているのだが。『新文学』は、七九年八・九月合併号（通巻173号）から『文学学校』と題号が改められ、さらに八四年九月号（通巻234号）から今につづく『樹林』と改題されている。

二カ月に一号の合併号もまじえつつ、『新文学』↓『文学学校』↓『樹林』と月刊を維持して、この六月号で通巻693号に達した。発行人の移り変わりは、次のようである。小野十三郎（一九六三年八月）↓小島輝正（八四年九月）↓小野の高齢化を受け、この時期から校長・代表理事の分担体制となる）↓三井葉子（八七年一〇月）↓小野十三郎（八九年九月）↓倉橋健一（九一年三月）↓長谷川龍生（九二年三月）↓細見和之（二〇一四年一月）

発行人だった期間、各氏は文学学校の校長や文学協会の代表を務めていた。フランス文学者・作家の小島以外、みな詩人である。また、倉橋、細見以外、今は故人である。

ぼく（小原）が三年半の夜間部の生徒を経て、事務局で仕事をするようになったのは一九九三年三月（その一年後には、文学学校事務局長と文学協会理事の任をまかされた）。主には、直接見知っているその前後以降のことについて触れることにする。

九二年前後の数年間、在校生数が減り、もっぱら在校生

の学費に頼る会計面でもピンチだった。それらを切り抜けるべく九二年一〇月、理事の大幅変更があった。旧理事の全員辞任のあと、中堅講師（チューター）で新理事会（代表理事・高島寛、理事・葉山郁生、同・木辺弘見ら）を結成した。と同時に『樹林』本誌の発行回数を減らし季刊とすることにした。また、年四回出していた通教部スクーリング用の「通教部文集」を『樹林』に組み入れた。

それ以降『樹林』は、本誌四冊、在校生作品特集号二冊、入学案内号二冊、通教部作品集四冊で計一二冊の発行体制を長くつづけてきた。だが、文校修了生である朝井まかての直木賞受賞効果で四七三名（二五年四月／ほかに、『樹林』購読者でもある休学生が約一〇〇名）までに増えた在校生総数は徐々に減っていき、一八年一〇月には三五〇名（休学生は変わらず約一〇〇名）を切ってしまった。追い打ちをかけるように、紙代などの物価高騰、消費税や郵送費の値上げもあり、『維新』が大阪市・大阪府の首長になってからは、それまでの学校や小野賞への年間補助金百数十万円が打ち切られたままであり、とうとう会計の支出を減らすために一九年の半ばからは本誌をさらに二冊減らし、年間一〇冊体制に移行した。そのうえで二〇年四月には、七年半ぶりに文校の学費改定をせざるを得なかった。

一九九九年三月に創設された小野十三郎賞の発表媒体は、『樹林』本誌である。その小野賞は理事会を中心とした賞

実行委員会が主催し、創設以来の実行委員会代表が長谷川龍生、二〇一五年以降の代表は葉山郁生。ちなみに創設時の選考委員は、荒川洋治、上田正昭、金時鐘、倉橋健一、辻井喬の五氏。

本誌が〈春期号〉と〈秋期号〉の年二冊になったため、小説同人誌評欄、詩時評欄、および小野賞受賞者インタビューは、掲載の場を大阪文学学校HPに移した。このとき、詩同人誌評を新設した。三〇年来変わらぬ本誌の内容は、小野賞発表、大阪文学学校賞（小説・詩・ノンフィクションの3部門）発表、定款④に関連する講演会の講演録（最近では堀江敏幸、三浦しをん、小川洋子……）、金時鐘（文学学校特別アドバイザー）・校長・チューター・事務局員らの詩作品、新しくチューターになったものたちの小説や評論、修了生で今も文校関係の同人誌で書き続けているものたちの小説、文校関係者の新刊著作に対する書評、文校に深くかわつてきた故人の追悼特集、チューター推薦による在校生の三〇枚以内の小説・エッセイ・詩と多岐に及んでいる。

追悼特集には、小野十三郎のほかにも、名物チューターだった北川莊平、川崎彰彦らの号もある。また作家特集としては、大阪文学学校五〇周年記念祭で基調講演をしてもらった文校修了生・田辺聖子や、大江健三郎、最晩年まで



2022年3月31日・朝日新聞〈夕〉“まだまだ勝手に 関西遺産”——昼間部土曜日のクラス生が『樹林』を手に手に

小野賞の選考委員を務められた辻井喬らを取り上げている。

春と秋の入学案内号二冊は六〇数ページにとどめているが、ほかの八冊は一四〇〜二三〇頁の厚さである。その一〇冊で、製本代、編集費、デザイン料、テープ起こし代、通教部生(二五〇名・休学生(二〇〇名・一般購読者(四〇名)への送料などトータルで年間七〇〇万円ほどを費やしている。

コロナの時代になり、在宅がち故に書くことに挑もうと新人生は増えてきたが、クラスゼミ(各自が持ち寄った作品の合評)の後のコーヒータムや飲み会が無くなって継続率が落ち在校生総数は伸びていない。それでも二〇二二年度の文校全体の収支は、三年ぶりに黒字を計上することができた。

文学学校出身者から、芥川賞受賞に田辺聖子(一九六四年/第五〇回)と玄月(二〇〇〇年/第二二二回)、直木賞受賞に朝井まかて(二〇一四年/第二五〇回)が名を連ねているが、そのほかにも芥川賞候補五名八作、直木賞候補四名九作を輩出している。そのうち、芥川賞候補の二作は『樹林』掲載作である。

『樹林』や文校を母体とする小説同人誌から、『文芸思潮』、『季刊文科』に転載されるケースもあるが、『三田文学』

編集部の高評価を得て『文学界』に転載されるのはより狭き門で、ひとつの目標になっている。最近も、文校の講師や修了生が生み出した小説同人誌『せる』121号で発表した在校生の小説が、二〇二三年上半期同人雑誌優秀作に選ばれ『文学界』六月号に転載されている。

二〇〇六年下半期以降今回までに、全国の同人雑誌を対象として優秀作に選ばれ『文学界』に転載された文校関係者は、一九人にのぼる。したがって、過去一六年半(年に二名)では、文校関係者が半数を超えることになる。そのうち、『樹林』本誌から二名、『樹林』在校生作品特集号から一名、『樹林』通教部作品集から三名選ばれている。ほかの一三名は、文校系小説同人誌それぞれからである。

上記『せる』以外に、現在も活動中の文校系小説同人誌は二二ある。列記すると――『あるかいど』『黄色い潜水艦』『飢餓祭』『白鴉』『つくる』『雑記囃子』『Genea』『あべの文学』『カム』『星座盤』『メタセコイア』『空とぶ鯨』『異土』『mon』『Babel』『組香』『文の鳥』『茶話歴談』『ココロコ』『クレス』『稲麻竹葦』

詩同人誌も、七グループある。――『詩遊』『小手鞠』『ドー』『さん』『月の村彦番地』『雲』『詩杜』
文校としては日頃から、地方文学賞や出版社系新人賞への応募をすすめるが、文校を修了した後も地道に未永く書きつづけていく場として同人誌活動を推奨している。

大賞の藤岡陽子、第八回小説宝石新人賞(優秀作)の大西智子、第一五〇回直木賞の朝井まかて、第九二回オール讀物新人賞受賞後に三度直木賞候補の木下昌輝、第一一三回文学界新人賞の馳平啓樹、第五九回講談社児童文学新人賞の水野瑠見……。

今から六〇年前に発刊し、その三年後に購読者数・年間発行回数などの諸条件をクリアして第三種郵便物の認可を受け、毎年の審査をパスして営々と出しつづけた『新文学』『文学学校』『樹林』は、文学学校の事務局内の書棚に全冊揃っている。ほかにも、大阪府立中之島図書館に六九三冊全て揃っている。五年前、その書架で欠けていた初期の『新文学』三六冊を求められ、どうにか取り揃え寄贈したことがあったのである。

六七歳で亡くなるまで、大阪文学協会の理事長だった小島輝正が残した一文を紹介して、この稿を締めくくりたい。大阪文学学校発の機関誌であり文芸誌であり同人誌でもある雑誌を『樹林』と改題した含意が読み取れるだろう。

《大阪文学学校に属すべき栄光があるとすれば、それは、多くの無名の書き手たちを絶えず種子のごとく蒔き続けて、鬱勃たる文学的植林を遂行したことにある。》――(『新日本文学』八三年一〇月号)

《文責:小原政幸/葉山郁生一部補足》



「季刊遠近」同人 中央は勝又浩先生、一人置いて右は前主宰・難波田節子

一九九六年一月に「季刊遠近」の創刊号が発行された時、傍で見守って下さり、貴重な助言を下されたのは、文芸評論家の故久保田正文先生である。

編集委員からお願いによって、先生はその創刊号に、ご自分の中学五年の時の同人雑誌の思い出を寄せて下さった。ところが何と、「古い記憶の底から」というその文章は、ご自分の作品ではなく、名前も覚えておられない同人の詩についての記憶であった。謄写版擦りのわら半紙三〇枚くらいを、ホチキスで綴っただけの粗末な同人雑誌だったそうだが、その中の一編の詩に深い感銘を受け、半世紀以上経って出た弟子たちの同人雑誌の誌上で紹介なさる先生の温かい人柄に、編集委員は感動しないではいられなかった。久保田先生は、そういう方だったのである。

そもそも「遠近」を立ち上げた人たちは、朝日カルチャーセンターで久保田先生から教えを受けた仲間だった。カルチャーセンターは新宿の住友ビルの四階でやっていたので、そのクラスでテキスト代わりに毎月出していた同人雑誌に「よんかい」という名を付けていたのだ。先生がお歳を召して、毎週の講義に出席なさるのが体力的に無理になったということ、講座が閉じられることになり、「解散を

「季刊遠近」の来歴



「季刊遠近」

主宰 小松原蘭

全国同人雑誌賞 特別賞

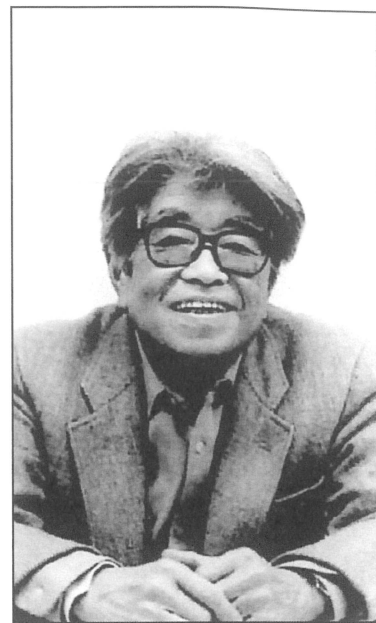
受賞の言葉「遠近」 事務局長 江間 徹

全国同人雑誌協会は全国で出されている同人誌から、選考会で特に優秀な雑誌を選んで表彰しているが、本年は我々の「季刊遠近」が選ばれた。個人としては、先年小松原蘭の「いもうと」という作品が、最優秀作品として選ばれたが、今回は「全国同人雑誌特別賞」である。七月二十九日に大阪で授賞式が催される予定だ。光栄なことである。

季刊遠近の創刊から今年で二十七年が経つ。その間のバックナンバーが書棚のスペースをかなり占め、会計報告などの色褪せた資料が分厚くなっている。そこには途中で入った私の知らない人の名も多くあり、私の記憶以前の誌の歴史が思われる。

気候異常に因る大災害、コロナ、戦争など辛いことの多い昨今、会員の書く力を集めて発行を続けて行けたらとあらためて気を引き締める。

「季刊遠近」(神奈川県)



故・文芸評論家 久保田正文氏

惜しむ会」が開かれたのがその数か月前だった。その席上、この仲間で何とか文学の勉強を続けようではないかという案が出たのである。毎週集まって先生の講義を受け、議論し合った親しい仲間だったから、とんとんと話が進み、その場で新しい同人雑誌発行の計画が立ち上がったのである。「遠近」というユニークな誌名は、先生からの贈りものだった。表紙絵は編集委員の一人が画家の兄に頼んで描いてもらったものだ。集まった同人は二三名。創刊号には意外なほど作品が集まり、週刊読書人や文学界で取り上げてくれた。久保田先生も喜んで下さり、月一回の合評会にも同席して下さった。編集委員の発案で、6号は「久保田正文研究特集」を出してみた。今まで先生のお書きになった沢山の論文や著書について、分担して感想や研究を書いたのである。この号には先生が昭和四七年に出版された「冬の



手前は文芸評論家／勝又浩氏

ランプ」という短編小説を掲載させていただいたこともあって、古い文壇の方々も懐かしがって下さった。当時まだお元気だった紅野敏郎先生が、特別にご寄稿下さったのもありがたかった。

先生は「米寿を祝う会」を開催した二〇〇〇年頃から、次第に体調を崩され、例会に顔を出して下さることも少なくなかった。それでも「遠近」をお送りすれば必ず全作品について丁寧な批評を書いて下さるのである。しかしそれも

ず、できる範囲でという形で受けて下さったのである。以来「遠近」は勝又先生のご指導によって、80号を越すほど継続して来たのだ。

30号は「創刊一〇周年記念号」であった。巻頭には勝又先生の「旅と文筆」という味わい深い文章をいただいた。50号が出たのは、二〇一三年六月である。この時は大奮発して表紙の色も多色刷りにした。

勝又先生にも無理をお願いして「文化の力」という一文を書いていただいたが、これに先生は私小説についても少し触れておられる。そして翌年、勉強社から出版された「私小説千年史」が、第28回「和辻哲郎文化賞」を授与された。「日記文学から近代文学まで」という読み応えのある文学論である。先生の弟子として、誇らしい限りだった。

「遠近」60号は、当然のことこの受賞の記事で盛り上がった。久保田先生がご存命だったら、どんなに喜んで下さったかと思っただけである。

62号は「遠近」二〇周年の記念号であった。何百号という歴史ある同人雑誌もあるのに、高々二〇年くらいで有頂天になっているのは恥ずかしいが、おめでたいことがあった後だけに嬉しかった。応援して下さった先輩同人誌代表の方々にもお祝いの言葉をいただくことも出来た。またこれは勝又先生の案だが、「私の中の文学の位置」という共通の問題についてエッセーを書くなど、同人雑誌でなければ



合評会の集まりで 左は勝又浩氏、中央は前主宰難波田節子

書けないようなことを書いてみる試みもしてみた。
しかし、楽しい思い出や記念すべきイベントばかりではなく、その間に悲しい事件や辛い試みにも遭っているのである。

創刊号から会長を務めてくれた野木義美が二〇周年を記念する第62号を発行して間もなく、不意に帰らぬ人になってしまったのだ。野木は都庁に勤める公務員で、福祉関係への貢献によって勲章まで授与された人である。島根県の出身で、地方色豊かな作品を沢山書いたが、同人の親睦を図って旅行の計画を立てたり、同郷の友人に「遠近」の購読を勧めてくれたりする熱心な会長であった。彼の墓参りには、「遠近」の仲間が誘い合って行き、花を手向けたものである。

野木の後を受けて代表の場についてくれたのは、編集委員の永井靖だった。永井はむかし大手の出版社に勤めていたことがあるそうで、編集に関する知識はプロであった。音楽が好きで、自身も地域の混声合唱団を率いていたが、作品も音楽に関わるロマンティックなものが多かった。明るくて誰からも好かれる性格だったから、同人も全面的に彼に協力してくれたものだ。その永井が、ある時、「遠近」の例会から帰った途端、突然死してしまったのである。一時はこれで「遠近」も終わりかと思われるほど、同人たちにとっては大きなショックだった。

しかし永井は友達を作るのが上手い人だったから、コーラス仲間の一人にすっかり後を託して逝ってくれたのである。同人雑誌の世界には入ってまだ日は浅いが、全面的に信頼して会の運営を任せられる事務局長として、江間徹を遺して行ってくれた。

何と恵まれた会なのだろう。何度も危い崖っ淵を歩きながら、何時もどこからか力強い救いの手が伸びて来て引張ってくれるのだ。どんな時も、「遠近」は、ついに一度も休刊したことがない。

80号くらいで、喜んでいる「遠近」を、いい気なものだと啗う人もいるだろう。しかし同人同士がこんな真面目に信頼し合ってやっている会は少ないのではないだろうか。最近解散した会の人が何人か入会して来て人数が増えたが、彼らも間もなくこの雰囲気には溶け込んでくれるに違いない。選んだ新しい「場」で、彼らがよりレベルの高い作品を発表してくれるのではないかと期待している。

81号から、編集委員も若手の小松原蘭に変わり、ベテランの江間事務局長とともに新鮮な歩みを見せてくれている。長い間、辛抱強く指導して来て下さった勝又先生も、まだまだお元気に活躍してくださっているし、先輩たちの轍を踏むのではなく、この機会に新しい「遠近」を開いてくれるだろう。

(前主宰／難波田節子)

全国同人雑誌賞

特別賞

「弦」

代表 中村賢三

受賞の言葉 弦の会代表 中村賢三

「同人雑誌特別賞」に選ばれたこと、誠に光栄で感謝に堪えません。創刊号を発行してから六十八年、『弦』という同人雑誌と共に歩んできた人生を振り返ると、感慨無量です。同人たち一人ひとりの顔と、その作品群が甦ってきます。その人にしか書けない光りを見たり、様々な人生模様の描写に出会ったりして教えられます。習作としか思えない拙さの中にも、そこには各々の人生観が籠められていて、共感してきました。

同人雑誌は一個人のものではなく、共に歩む同人たち、皆のものであり続けることです。ただし内に籠もることなく開かれた社会性も必要ですし、継続が情性に陥らないことも大切です、今後も常に前向きに生きいきと文学に取り組んで行きたいと思っています。創刊当時の「初心忘るべからず」の気概を新たに、これからも同人全員が、自らの文学愛を大切にして、鋭いペンを奮ってまいります。

弦

第113号





人間性豊かな文学への挑戦

同人雑誌『弦』は一九六五年に創刊した。愛知県には幾つもの先輩の同人雑誌があり、そんな中では同人全員が二十〜三十代前半で、ヒヨコのような存在にすぎなかった。

先輩誌の中には『作家』があり、戦後復活した芥川賞を最初に受賞した小谷剛が率いて、隠然たる勢力をもっていた。その『作家』の有力な同人、曾田文子氏が指導していた『新樹』と『草』が合併して『弦』は誕生した。

曾田は一九八三年病魔に倒れ、小谷も一九九一年に没したが、同人雑誌を担う人から人へと、その文学は受け継がれた。『弦』は創刊後も『未開地』や『無名』などの同人雑誌との合併や、他誌からの転入者を吸収し、常に開かれた同人雑誌であったというのも特長であろう。年二回発行のペースは、背伸びしない着実な歩みでもあった。だが文学への追求には貪欲でありたいと、毎月一回の読書会を休まず続けてきた。最近取り上げた書名と作者を以下に記す。

『恥辱』クッツェー、『密やかな結晶』小川洋子、『J.R上野公園口』柳美里、『苦海浄土』石牟礼道子、『ヴェニスに死す』トーマス・マン、『恋愛中毒』山本文緒、『山月記・李陵』中島敦、『82年生まれ、キム・ジヨン』チョ・ナムジュ、『ヴェネツィアの宿』須賀敦子、『ザリガニの鳴くところ』デリーリア・オーエンズ、『約束された移動』小川洋子、『永遠年経』温又柔、他に芥川・直木受賞作も臨機に取り上げるといふ、まったく自在な読書散策を続けている。

書物から学ぶことは多い。読書会では自分とは違う読み方があることも教えられる。個人の固執した考え方から解放され、新しい活力が生まれる。同人雑誌の合評会にも通じるものがある。自分の書いたものが批評され、長所、短所を指摘されて初めて気付くこともあるし、次作へのバネともなるだろう。しかし、他者との交流により得られる最も大切なものの〈心情の共有〉を忘れてはなるまい。

『弦』の同人は現在十五名、会員は十六名。同人は原稿提出ができる。

同人会費年二四〇〇〇円、会員年三〇〇〇円。会員の原稿提出には別に規定がある。掲載負担金、同人は頁四〇〇円、会員一〇〇円。追加本代一冊四〇〇円。

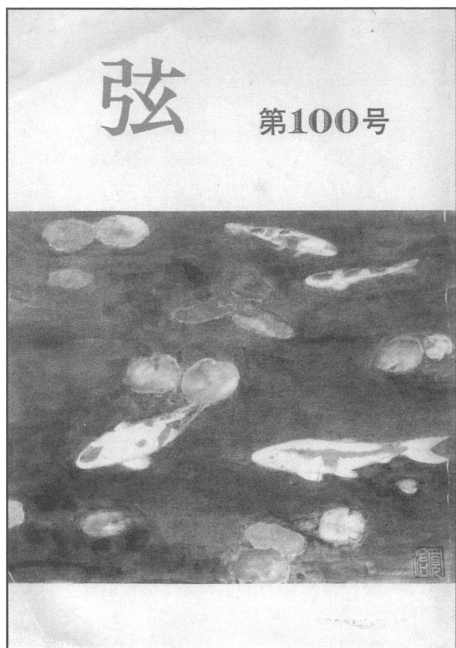
印刷部数は永らく五〇〇部だったが、印刷費と送料増等があり、現在は四五〇部に減らした。全国の同人雑誌と雑誌交流を続けている。

役員は代表(事務局)、書記、会計、監査、各正副。編集委員は八名で、執筆者への校正送付と最終校正までを手分けして行っている。読書会の会場はおもに名古屋市芸術創造センターを利用し、毎月第三水曜日午後合評会は発行月の翌月、翌々月の二回を第三日曜日の午後一般公開で開催している。いずれも同人のさまざまな協力があって、行われている。

弦の会では、二〇一五年にホームページを立ち上げた。「同人誌弦」文芸同人誌弦」で検索すると、『弦』一〇五号から最新号一三三号までネット上で読むこともできる。読後の感想や批評などを掲示板に書き込んでいただければありがたい。同人雑誌という狭い範囲だけでなく、より開かれた中で少しでも多くの人達に読まれ、評価されることを書き手は



2023年5月14日『弦』第113号合評会后、4年ぶりにマスクを外して記念撮影しました。
前列左より、小山、小森、中村、長沼、後列、高見、国方、白井、津之谷、木戸、そらいくと



弦の会 〒463・0013
名古屋守山区小幡中3・4・27 弦の会
電話 052・794・3430

『弦』は中部ペンクラブにおいて、その菌車の一つであるが、同人雑誌の橋を架け合って全国から手を携え、共に参加したいと熱望するものである。

(弦の会代表・中部ペンクラブ会長／中村賢三)

中部ペンクラブの活動

一九八六年に結成された中部ペンクラブは、同人雑誌の交流を通して、中部圏の文学の活性化を図ることを目的として活動し、本年は三八年目を迎える。二〇年目の節目にあたる二〇〇五年には全国の同人雑誌に呼びかけ「第一回全国同人雑誌会議」を名古屋市中で開催した。以後二〇一〇年の徳島県。二〇一九年の池坊東京会館。二〇二一年東京お茶ノ水にて、四回目を新しく結成した(社団法人)「全

期待している。
小説はフィクションの創作物にすぎないけれど、真実を超える力もあるのだと信じている。力不足の原因が文章力であれば、とことん文章を磨き上げたい。テーマが不明瞭ならば、構成から考え直せばよい。人間を描く力が足りないならば、人の生きざま、心理の表裏まで掘り下げて考えたい。俗にまみれない素直な自分のことばで表現することを心掛けた。とにかく書かないではおられない気持ちをもち続ける場所が同人雑誌にはある。
社会の変貌により、文字による書物の存在が薄くなっているのは時代の趨勢だが、経済重視の商業主義に陥ることなく、人間性豊かな文学への挑戦は時代を超えて不変と信じた。文芸は斯くあり続けたものであり、同人雑誌の牙城は守り続けたい。

国同人雑誌協会」と中部ペンクラブの共催として開催できた。

そして二〇二三年、大阪にて「第五回全国同人雑誌会議」が行われることとなった。地方に於いて営々と続けられている文学を愛する人々の、無為無償の尊い結晶ともいえる全国的な連帯を、感謝をもって迎えたい。



2013年徳島県三好市での同人雑誌フェスティバル
芥川賞作家吉村萬吾氏を囲んで、左に中村代表、中央に名村・宇佐美・木戸さんら



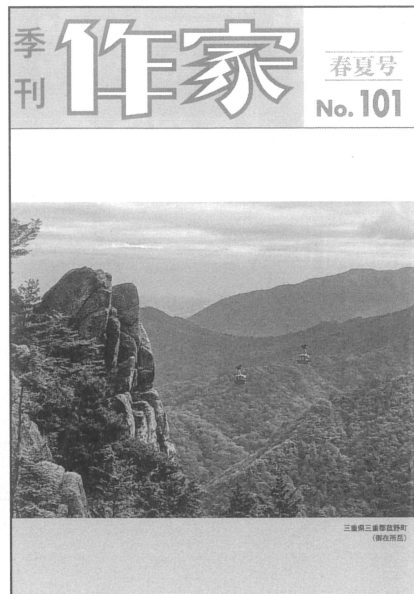
季刊作家 東京例会(祖父江次郎は欠席) 2023.4.22

『確証』で芥川賞を受賞した小谷剛氏が主宰をしていた文芸同人雑誌『作家』は、毎月発行され、小谷氏のカリスマ性は圧倒的だった。同人になるにも容易ではなかった。小説で氏が認めなければ同人になることもできなかった。そのため一作発表して、二作目を発表できずに消えてゆく人もいた。

しかしその『作家』は、彼の死により五百十六号で終刊した。小説を発表する場所を失った同人たちは路頭に迷った。小谷氏の薫陶を受けている同人も多数存在し、リニューアルした雑誌の発行を望む声も多く聞かれた。同人になって日が浅く、これからもっと書きたいという人も少なからずいた。筆者もその一人だった。

小谷氏亡き後は、ほかの同人雑誌に移った人や新たに同人雑誌を起こす人、あるいは書くことを完全に止めた人もいたが、五割がたの同人は、作品の発表を強く望み、雑誌の存続を熱望した。それに応える形で、小谷氏の盟友の『長良川』で直木賞を受賞した豊田穰氏が編集責任者となって一九九二年(平成四年)の春『季刊作家』が結成された。当時五十七名の同人が参加し、年四冊の発行で始めることになった。筆者は先輩同人に誘われて「季刊作家」

生きるために、自己救済のために



「季刊作家」

主宰 祖父江次郎

奨励賞

全国同人雑誌賞

受賞の言葉 「季刊作家」代表 祖父江次郎

このたびは全国同人雑誌賞奨励賞という栄えある賞をいただき誠にありがとうございます。選考いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

「季刊作家」は、「作家」主宰の小谷剛氏亡き後、残された同人間の声が高まり、一九九二年にリニューアルスタートしました。その後、高齢化などの理由により、同人数は減りましたが、同人たちの執筆への情熱はますます高まり、本年春には第101号を発行することが出来ました。創刊号から本年四月発行の第101号までの三十一年間に七〇〇編余りの小説を掲載しました。身を削るような体験をベースにした力作や他紙に転載された優秀作、あるいは文学賞を受賞した傑作など多種多様な作品群となりました。

今後はさらに充実した雑誌の発行に努めてまいりたいと考えております。皆様のご指導ご鞭撻を賜るとともに、温かく見守っていただければ幸いに存じます。

に加入し、文芸活動を持続することにした。執筆の場を確保できて、やれやれという気持ちだった。四十代前半のことである。

創刊当時の同人は小谷剛の薫陶を受けた優れた書き手が多く、投稿しても次号に回されることもよくあった。掲載にたるレベルの高い原稿が集まっていたのだ。作品の集まりも資金繰りにも懸念されることはなかった。その後、柳瀬道夫氏、今瀬憲司氏等に編集代表が交代し、筆者が編集代表を引き継いだのは二〇一二年夏号(第77号)からで、それから現在に至っている。

筆者の前の代表の時点では、同人は加入してくる人もいたが、退会してゆく人の方が多く、筆者が代表を務め始め



「季刊作家」創刊号

た時点では、二〇人余になっていた。原稿の集まりも資金繰りも悪くなった。そのため年に四回だった雑誌の発行は三回になり、ここ五年ほどは年二回にして雑誌の存続を図らざるを得ない状況になった。この状況を改善はできていないが、それでも昨年一〇〇号を発行することができた。

現在の同人は一三人になり、年二回の発行を辛うじて保っている。同人全員が投稿するわけではないので、原稿の集まりは悪い。資金繰りも悪い。作品の質の低下も見られる。それでも本年四月一日に一〇一号を発行できた。新型コロナウイルスの流行になり、対面で会うことも出来なくなつて合評会も中止になっていたが、この四月に四年ぶりに東京例会を開催した(名古屋例会は休会)。「作家」時代の影響で、同人や会員が全国に散らばっているため、遠方に住んでいる人は出席が容易ではない。おのずと関東圏に住んでいる同人の集まりになった。まだ新型コロナウイルスに対して不安があることと高齢化が影響してか、五人だけの出席だった。会員も含めれば、二十五名ほどになるので、今後は多くの人の参加を期待したい。

ところで、今「季刊作家」に大きな悩みがある。多くの同人誌でも同じ悩みを持っていて、またいまさら取り立てることでもないかもしれないが、同人の高齢化が進んでいることだ。他誌の紹介写真などを見ると結構若い人の顔も

見受けられるので、そういう雑誌が羨ましい。けれど「季刊作家」の平均年齢は七十七歳余で、最高齢者は九十歳である。みんな健筆で頼もしいがきりだが、このことは同人数の減少に繋がる大きな問題である。

「季刊作家」ではこの一〇年余の間に一〇人以上が退会していった。鬼籍に入った人、施設に入所した人、高齢を理由に書くという意欲がなくなった人、心身の病になった人など。一方加入した人は数人で、どこかの同人雑誌で書いてきた人か、若しくは一旦休筆していてもまた執筆意欲が湧いてきた人だ。それらの新規加入者も高齢者で、若い人の加入は皆無である。この先も若い人の加入は期待できそうにない。

これ以上同人が減ったら、ますます原稿の集まりは悪くなるであろうし、同人の費用負担が増えるのも必至である。そうなれば、年二回の雑誌の発行を一回にするか、同人の負担を増やさなければ現状を維持することは困難である。誰か資金援助をしてくれなにかと真剣に考えるがそんな奇特な人もいない。

さらに最近は大きな問題が生じている。それは諸物価の値上げであり、景気の低迷である。そのため雑誌の発行にかかる諸経費の値上げも顕著だ。文化事業に対する自治体の支援も相変わらず少なく、審査基準も厳しい。予算も少ない。文化的なことへの理解が乏しいのだろう。「作家」

では公費の支援を受けていた時期もあったらしいが、「季刊作家」になってからは基準を満たしていないということとで全く受けていない。運営経費は同人費や会員費でまかなうしかないのである。同人の負担をこれ以上増やしたら、それを理由に退会する人も出るような気がする。今後物価や景気がどのようになってゆくの心配でならない。

雑誌発行の前途には、暗雲に覆われた茨の道が続いているのだ。廃刊の言葉が脳裡をよぎる。

閑話休題。

同人誌の現状を考えると、懸念することが目立つが、大手の文芸雑誌の新人賞への応募は、以前より増えているようだ。二千編を超える応募数の雑誌も珍しくない。むかしのように同人雑誌で育ち、そこからプロの作家を目指すことは困難で、そうであるなら、まずは新人賞を受賞して注目されるほうが手っ取り早いことだろう。最近では活字離れが進み、月に一冊の本も読まない若者も多いと聞か、新人文芸賞は若者からの応募が少なくないようだ。そんな若者が目を見張るような傑作を書けるとは考えにくい。そうであるなら、同人雑誌に加入して、小説修行をする方法もあると思ってもよいだろう。が、忙しい世の中に生きている若者は、時間を持て余している高齢者のように、同人雑誌に小説やエッセイ等の文章を書いている暇などな

いのか。現代の若者には、小説を書いて自身の能力や運を計り、駄目なら諦めてほかの事を探ろうとする、その見極めが早いようだ。価値観の多様により、生き甲斐とした選択肢も増えているのだろう。

小説を書いて完成し、それを読んでもらうという行為を長い間続けている筆者には、これほど心を湧き立たせる生き甲斐はほかに見当たらない。いつでもスムーズにペンが進むわけではないが、一度この快感を味わったら虜になるに違いない。書くことは、いつでも何歳からでもできる。手書きだった原稿も、今ではパソコンで書けるようになり、格段に楽になった。筆者も三〇年余パソコンの世話になっている。

小説やエッセイを書く行為は、孤独な作業であり、それに打ち勝つ強靱な意思が必要である。生半可な気持ちでできることではない。思うように書けず悶々と苦しみ、その苦しみに屈しない強い心が必要なこともある。自信をなくしてはいけない。諦めてはいけない。苦しみを乗り越えて作品が完成した時、この上ない喜びと達成感が沸々と湧いてくるから。

筆者は一〇〇号発行の取材を受けた時、新聞記者になぜ書くのかと問われて、

「人の世で生きていると、滓のようなもの、黴菌のような

ものが知らないうちに心身に付着してくる。それを書くことによって削ぎ落し、書き続けて生きてゆく力を得る。それが死ぬまで繰り返されるような気がする。つまり書くことは自己救済の道です」と話した。

書き続けることは、充実した人生を生きることでもある。そう思っている人は多いに違いない。そのためにも今ある同人雑誌が存続することを願うばかりである。

(祖父江次郎)



『季刊作家』編集事務局代表 祖父江次郎
〒495-0013
愛知県稲沢市祖父江町二俣上川原八四の二
☎ 0587-975472
mail: ch00987@yahoo.co.jp

全国同人雑誌賞 奨励賞

「婦人文芸」

代表 都築洋子

婦人文芸



2022・12 102号

受賞の言葉 「婦人文芸」代表 都築洋子

この度は第二回同人雑誌大賞奨励賞を受賞させていただきありがとうございます。「婦人文芸」として表彰されるのははじめてなので、喜びもひとしおです。創刊号から現在までのすべての同人達に与えられたプレゼントとして、同人一同喜びを分かち合っています。先輩方のたゆまぬ尽力によって一〇〇号を超え、一〇二号まで発行できていることに感謝の念を忘れずに、これからも「婦人文芸」の仲間との交流によって学び、支え合いながら一人の女性として成長していける同人雑誌にしていきたいと思います。また、他の同人雑誌の方々とも交流し、共に学び高めあう機会も作りたいです。「婦人文芸」に新しい力を与えてくださり、本当にありがとうございます。選考委員の皆様には心より感謝申し上げます。



婦人文芸例会



菅原さん宅での婦人文芸例会

七〇年の伝統女性誌

「婦人文芸」は昭和九年から十二年にかけて発行されていた月刊文芸総合雑誌「婦人文芸」(主宰・神近市子)の名を引き継ぎ昭和三十一年(一九五六年)に創刊されました。発起人は藤井田鶴子のほか五十名。顧問として、堀文子、神近市子、壺井栄、野上弥生子、円地文子、佐多稲子、平林たい子など女流作家を代表する方々が名を連ねていました。

創刊号には「この度、戦争やその他の事情から散らばっていた創作活動を望んでいる女の人たちが、お互いに連絡をとって、勉強し合い、はげまし合い、育て合うために、グループをつくろうということになりました」と記されています。

当時の日本社会はまだ封建的で、男性は仕事、女性は家庭という役割意識が強く、女性の社会進出はまだ先のことでした。そのような時代にあつて創作活動を望んでいた女性たちのために切磋琢磨して文学修業をする場として「婦人文芸」が生まれたことを忘れてはならないと思います。創刊から六十七年が過ぎ、ジェンダー平等の意識が広まり性別による差別や不平等をなくす方向に変わりつつあります。

一九八六年に男女雇用機会均等法、一九九九年に男女共同参画社会基本法が施行され男女平等の実現に向けてさまざまな取り組みもなされています。(今でも男女の雇用や賃金の格差はあり、育児や家事は女性の負担が大きいことなど課題はありますが)文学においても女性も男性と同じように活躍する時代になって女性だけの同人雑誌である意

義は薄れているかもしれませんが。それでもなお、創作活動と仲間との交流によって一人の女性として成長するという創刊号の思いを受け継ぎ、男子禁制は譲れないことを考えています。

コロナ禍の前までは毎月一回例会を開いて掲載予定の原稿について意見を交わしたり、読書会や合評会、講師をお呼びしての勉強会を開いたりして会の活動を続けてきました。例会の会場は四ツ谷の「ルノアール」から銀座の「ルノアール」に移り、例会のあと「銀座ライオン」で例会の振り返りや談笑するのも楽しみな時間でした。また、菅原治子さんには例会や編集作業のために自宅を開放していただき、ゆったりと居心地のいいお部屋で勉強したり作業をすすめることができました。かつての日常を取り戻せたら、例会を再開して受賞の喜びをとくに祝いたいと思います。

二〇二〇年、「婦人文芸」は記念すべき二〇〇号を発行することができました。他の同人誌と同じように同人の高齢化などにより同人の数は減少傾向で(現在会員は十二名、誌友は十八名です)、一〇〇号のあとの存続が危ぶまれたところもありますが、一〇一号、一〇二号を発行、現在一〇三号に向けて編集作業をすすめているところです。

最近の傾向としてベテランの同人は創作だけでなく、何気ない日常を洗練された筆力で描かれたエッセイも充実しています。また、新しく入会した同人によって描かれた世界観の異なる作品もあり、新たな息吹も感じられます。

「婦人文芸」の歴史の中で今でも同人の記憶に鮮やかに刻まれているのが発起人の藤井田鶴子さんの存在です。藤井さんは一九六〇年頃か



2014.10.10

筆者が入会したのは二〇〇九年の年末でした。勤務先の男女平等推進センターが入っていた施設内の図書館の受付に置かれた「婦人文芸」に目がとまったのが出会いでした。受付で借りて一気に読み終えたことを覚えています。すぐに連絡先の佐藤浩子さんに電話をすると、快く受け入れてくれて例会に参加することをすすめられ、例会で同人のみなさんに会うことになりました。そこは創作意欲で活気づいていて気持ち華やぐような空間でした。筆者よりもずっと年下の佐藤浩子さんが編集作業などで活躍されている姿もたのしく、私よりも年長の先輩方も澁澁として輝いて見えました。自分よりも先を歩いている魅力的な女性がいることで世界が明るく開けたように感じられたのが懐かしく思い出されます。

筆者は遅ればせながら二十代後半から文学に関心を持ち小説を書いていたのですが、子育てと仕事に追われて文学とは離れた生活を送っていました。もし、入会する一年前に病気を患うことがなければ「婦人文芸」と出会うことはなかったでしょう。仕事を制限せざるを得ない時に紹介された職場が「婦人文芸」が置かれた図書館のある施設だったからです。とはいっても、入会してから時々思いつくままに創作やエッセイを書くくらいで、例会にもあまり出席していませんでした。その間、佐藤浩子さんの発案で自由に書きたいことを五枚くらいの枚数で書き、読み合うという「五枚の会」を続けたことがあり、毎回何を書こうか楽しみにしていたことが記憶に残っています。佐藤浩子さんのあと編集作業を担当することになったのも頼りない限りで、コロナ禍になつては例会も開けないため、志津谷元子さんと二人でやりとりしながらの編集作業になりました。菅原治子さんが代表を退くため受け継ぐことになりましたが、代表を務めるには力不足で、まだまだ学ぶことが多いと感じています。

「婦人文芸は生命の支えです」「婦人文芸の仲間助けられました」など「婦人文芸」によって救われたという言葉を発表する同人がいる限り「婦人文芸」を続けていきたいという先輩方の思いを受け継いでこれからも精進していくつもりです。

(代表) 都築洋子

ら新宿歌舞伎町のビルの一階で喫茶店「花」を経営されていました。「花」は同人たちの憩いの場でもあり、ほかに数々の著名人が訪れていたそうです。同じビルの九階にあった自室を「婦人文芸」の編集室として開放されて、同人たちが分担して手作業の編集作業をすすめていました。13号(一九六〇年)から60号(一九九一年)までが歌舞伎町の住所で発行されています。子育て中の同人は幼い子どもを連れての作業で、女性の書き手ならではの光景もみられたのではないかと想像できます。「花」と編集室のあったビルの外観は吹き抜けの構造になっており、ビル自体はすでに老朽化していましたが、吹き抜けの空間があることであかぬけた雰囲気を出していたようです。当時を知る同人の秋本喜久子、河田日出子、岡田アンリ、志津谷元子、大場南は今でも健筆で「婦人文芸」で活躍されています。この吹き抜けのあるビルから発想されたという志津谷元子の「吹きぬけの青い空」は、五年生の主人公の男の子を中心に老朽化したマンションに住む四家族と、立ち退きを迫る管理人とのぶつかり合いも含めた交流を描いた作品で、第一四回小川未明文学賞の大賞を受賞、二〇〇六年学習研究社から出版されました。

二〇〇一年小山七々子(菅原治子)の『四年生の頃』(沖積舎)が第五回私の物語・日本自分史大賞優秀賞を受賞、二〇〇六年に福音館書店から出版された『チンチン電車』が

走つてた」が第十九回読書感想画中央コンクールの中・高小の部の指定図書に選ばれました。戦中、戦後にかけて小学校時代を過ごした女の子が、いじめや集団疎開などの経験と、祖父の家(チンチン電車の走る道路沿いに建っていました)で間借りする人達と家族との交流によって成長する物語です。

時代はさかのぼり、一九八〇年、江川晴の『小児病棟』が第一回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞優秀賞を受賞したことも同人たちが喜びを分かち合うニュースでした。二十一歳の新人看護師と深刻な病気を抱えながら日々を生き抜く子供達との間に育まれる絆を描いた物語で、作者の看護師としての経験に根ざした筆力で読ませる傑作です。同年、桃井かおり主演、早坂暁脚本でテレビドラマ化され、三十パーセントを超える視聴率を記録して話題作となりました。

「婦人文芸」の同人は女性ということもあるのかもしれませんが、それぞれの生活を守りながら書きたいことを書くという姿勢の書き手が多く、その点では作品によって世の中に認められたいという意欲が薄いところもあると思います。それ故、仲間の作品が文学賞などで評価されると喜びをともにすることはあっても、嫉妬心のようなうらやみ気持ちを感じることはないのが長所だと先輩方は教えてくれます。



「八月の群れ」合評会後の懇親会風景（コロナ以前）

この度、全国同人雑誌奨励賞を賜りました『八月の群れ』は、一九八一年八月に創刊された今年で四十二年目となる関西の同人雑誌です。

同人雑誌の仕掛人と言われている、作家の故竹内和夫氏の「小説入門」の受講生たちが立ち上げたものです。どういった成り行きで『八月の群れ』が誕生したのかは、四十二年前の創刊号の巻末にある編集後記より創刊メンバーの足立和雄氏が書いたものを当時のままで抜粋したいと思います。

『編集後記』（一九八一年八月 創刊号より抜粋）

昭和五十五年八月二日、大阪グランドホテルの喫茶室は四月より開講された竹内和夫のACC講座「小説入門」の受講生有志の熱気がクーラーを吹き飛ばしていた。当日の案内状に私は次のように書いた。

「……きのうまで全く見知らぬ者どうしがふとした縁でひとつの教室で勉強することになりました。ほんのかけらながら友情らしきものも芽生えてきました。このまま残り講座終了とともにサヨナラとなるのはなんか淋しい気がします。何とかしたい、このまま終わらせたくない、どう

書きたい志を大事に

全国同人雑誌賞 奨励賞

「八月の群れ」

代表 葉山ほずみ

八月の群れ

■山咲 真季／幸村 義／松 良子／三嶋 幸子／仲野 和秀／
小柳 さしえ／伊東 貴之／大森 康宏／牧 美貴江／
葉山 ほずみ／野元 正

Vol. 74

2022-5

受賞の言葉「八月の群れ」代表 葉山ほずみ

この度は全国同人雑誌奨励賞を賜り、厚く御礼申し上げます。

同人雑誌の高齢化や減少が問題とされているなか、このように同人雑誌の活動を押し上げてくださる存在があることは、我々書き手にとって、とても心強いものです。運営には大変なご苦労があると存じますが、これからも全国の同人雑誌の書き手たちが報われる場であって頂ければ、同人雑誌の未来も変わってくるのでは、と思います。これからもどうぞよろしく願います。

運営に関わっておられる方すべてに心より感謝申し上げます。ありがとうございます。



現在の「八月の群れ」合評会



「八月の群れ」合評会後の懇親会風景(コロナ以前)

関西には老舗同人誌と言われる長い歴史を持つ先輩雑誌が多く存在します。『八月の群れ』の四十二年というの、さほど長いものでもないのかもしれませんが、さらに、新しい同人雑誌も毎年のように誕生しています。

私たちは時代に合わせ、上手く変化していくことを必要としているのではないだろうか、と考えています。先輩同人誌が作ってくれた道を辿りながら、新しい同人誌が取り組んでいる興味深い

この小舟は『文学への情熱』を乗せ続け、創刊メンバーが志したものを継承しているのだと思います。私たち現在の同人は時代によって移り変わりながらも、『書くことへの渴望』と『文学への情熱』という創刊メンバーと同じ気持ちで心を刻んでいます。

同人雑誌は舟に似ていると思います。一隻の『八月の群れ』という舟から誰かが下船すると、また誰か新しい人が乗船する。そうやって四十二年間、『八月の群れ』は進み続けているのではないのでしょうか。

四十二年前、今、代表と副代表をしている私と山咲同人は小学一年生でした。そんなときから続いているのだ、と思うと、小説を書くという目的だけで繋がっている縁がとても豊かなものに思えてきます。

文藝同人誌『八月の群れ』の名前の由来は創刊メンバーである中島氏が口にした思いつきがすんなりと、他の同人からの賛同を得て決まったそうです。

約四十三年前、一つの文章教室に集まった縁も所縁もない人々が『何かを書く』という唯一共有できる情熱を持ち、約四十二年前、この『八月の群れ』が誕生したわけです。

創刊メンバーと直接の面識がある同人はほぼ現在はおられません。創刊メンバーで二代目の代表だった徳田氏に発刊するたびに送らせていただいていたので、その御縁もあり、四十周年記念号(八月の群れ七十三号)のときに、寄稿していただきました。

その寄稿の最後に彼は、「新陳代謝は同人誌の宿命。三年続け

すれば、どんな方法があるか。一緒に話し合いたいと思います……」

ゆっくりやりましょう。会はスタートした。テーマ「駅」三枚以内の作品が十九編寄せられてコピー作品集第一集が出来た。第二集は五枚以内、再びテーマを決めて書いてみた。講座とは別に月に二回の例会を持ち、どこがいけないのか、どうすればいいのか、話し合った。会を重ねるにつれ、小説の難しさに何度も尻込みしそうになりながらも、逃げてはいかん、自分のためである、書きたい志を大事にしようと思っしあった。会の誕生から一年、記念すべき八月に私達は創刊号を見ることができるようになりました……。(抜粋ここまで)

全国同人雑誌最優秀賞 同人雑誌大賞

賞金30万円

同人雑誌大賞
新設30万円



「八月の群れ」(兵庫県)

全国同人雑誌賞 奨励賞

運営方法などを参考に、形を変えながらも継続していく方法を模索しています。

SNSやインターネット上で簡単に作品を発表する場が増え、紙や文字の在り方も変わってきました。同人雑誌の良さである『他人の意見を聞くことができ、先輩同人から学ぶ』という環境が薄れている気がします。それが良いことなのかそうでないのかを判断することはできません。ただ、どんな形であれ、作品を生み出すと思っている人たちは多かれ少なかれ『文学への情熱』を持っていると思います。そして、同人誌とネット上でのみ活動している書き手が上手く融合できる日がくればいいなあ、と思っています。

現在、『八月の群れ』の同人は十一名で四十代から八十年代の書き手が切磋琢磨しています。発刊は年に二回。同人は作品を編集委員五名に提出し、所感をそれぞれ共有しながら返送し、編集委員は掲載するかどうか、掲載順位などを話し合います。

会費は現在月千円で、掲載時のページ数×三百円で発刊しています。文学賞の選考委員が二名、新聞の同人雑誌評担当者が一名在籍しています。

常に同人を募集しておりますので、ご興味のある方はいつでもお問い合わせくださいませ。コロナ禍もようやく収束が見え始め、同人たちが楽しみにしている合評会後の飲

み会も再開されます。

最後になりましたが、この度、奨励賞を頂くことになり、文芸思潮の皆様にご心より感謝申し上げます。四十二年前にこの雑誌を立ち上げた創刊メンバーの先輩同人たちは、まさか四十二年後まで雑誌が続いていてこのような賞を頂くことになるとは思っていません。鬼籍に入った方も多く、朗報をお届けできないのが残念ではございますが、これからも新陳代謝を繰り返しながら永く続けていきたいと思っていますので、どうぞよろしく願います。

(「八月の群れ」代表／葉山ほずみ)



「八月の群れ」代表 葉山ほずみ

〒651-2273

神戸市西区桃台四・一三・四・704 森脇方

mail: hozumi@kpb.biglobe.ne.jp



こちらは第10号の外部合評会の写真です。皆さん若い！



mon 代表 飯田未和
〒545-0037 大阪市阿倍野区帝塚山一・一〇・四五・208
Mail: doujinmon@ares.eonet.ne.jp

関西以外の同人誌とは交流の機会もなくお互いほとんど面識がありません。有難いことに、このたび全国同人雑誌協会の新人賞をmonがいただくことになり、これを機に関西以外の同人誌とも交流できたらと願っております。一人一人が孤独に書き続けるために、同人誌の仲間は強力な支えであり、同人誌の縦横の繋がりは大きな励みになります。深刻な活字離れや出版不況がよく取り上げられますが、好きで小説を書き、紙の本にすることに生きがいを感じているもの同士、どうか仲良くお付き合ってください。

何をするにも手探りで、作品だって浅くなりがちです。もつと経験を重ねて、人の生を深く見つめられるようになったら書く作品も変わるのでしょうか。
未熟ゆえ、伸びしろがあると思うとわくわくします。浅い、軽い、と言われている私たちの作品は、この先どう成長していくのでしょうか。
*
先の第二十号記念号には同人以外の書き手にも声を掛けて参加してもらいました。過去にゲストで参加してくれた人に限らず、普段の合評会に参加してくれている人や交流のある同人誌に声を掛けてもらいました。皆さんお忙しいので引き受けてもらえるか不安だったのですが、快く参加してくださり嬉しかったです。大阪文学学校出身のメンバーが在籍していたクラスの担任である、津木林洋チューターと青木和チューターも参加してくれました。
二十号記念ということで、「二十人で、原稿用紙約二十枚の作品を、二十作品載せたい！」などと、本当に夢のような企画だったのですが、皆さん原稿も書いてくださり、発行前の合評にも何度も参加してくださって、同人からの十作品とゲストからの十作品を載せた贅沢な記念号ができました。
まだまだたったの十年ですが、この記念号を作ることで、色々な方の支えがあつてこれまでやってこれたのだな

と改めて実感しました。書くのは一人の作業でも、同人で互いに作品を読み合つては感想を言い、それぞれ最低でも二回は書き直しています。仕上がった作品は分担してお互いに校正をします。さあ、入稿するぞとなつても再度誤字脱字が残っていないか手分けしてチェックをしています。そうやって何度も同人の目に触れて完成させた作品を自分たちで編集して印刷会社に入稿します。
本が仕上がれば、次は外部合評です。文学学校の方や他の同人誌の方がmonを読んで参加してくれます。感想をもらうのは本当に有難いですし、交流することそのものが次号への大きな励みになります。外部合評でお会いできなくても、色々な方から「届いたよ」「読んだよ」と連絡いただきますし、お手紙やメールで感想をいただくことも多いです。
文学フリマに行けば、年に一度文学フリマでしか会えない方とたくさんお会いできて同窓会のようなものです。あの人もまだ書いている、あの同人誌もまだ続けている、monも頑張らないか、と思います。
一人ではできないし、同人だけでもできない。そんな十年を過ごしてきました。
*
大阪文学学校や神戸エルマール文学賞の存在もあり、この十年、関西の同人誌とは交流を深めてきました。一方、



私達は、創刊号(二〇一八年十二月刊)以来、会員自身の創作のモチベーションを高める」ということを第一義的に考えてきました。

私達の場合は年間を通して原稿の締め切り日が一度きりですが、発刊までにそれが必ずやってきます。毎号、全員が掲載をめざし、期日までに自作品を書き上げます。やがて発刊の日を迎え、数日間を経た後、作品を読んでくださった読者から何らかの感想を頂戴することになります。この時が私達にとってはおもった大切な時間です。つまり、自作品の「読者」を実感するときなのです。このことで書き手の内部にやる気が湧きます。やる気があれば、より一層面白い作品を書こうとします……この繰り返しが始まるような同人誌を作りたいと考えたのです。この循環が起きなければ、会員のやる

歴史時代小説専門の同人雑誌

茶話歴談は「歴史・時代小説アンソロジー」と銘打っています。歴史・時代小説というジャンルは、伝統を重んじながらも、歴史の最新研究も反映させていく使命があると考えています。いわば古さと新しさの両方を楽しむ文芸だと言えます。私達は、茶話のように気軽に歴史創作を楽しめる本でありたいとの願いを込め、「茶話歴談」とネーミングしました。

私達は、創刊号(二〇一八年十二月刊)以来、会員自身の創作のモチベーションを高める」ということを第一義的に考えてきました。

「茶話歴談」

編集長 丹羽志朗



収録作: 黒崎資子『真夏の夜の鎌倉物語』/ 真弓創『日本の副王、百鬼を追う』/ 天河発『ユダになれなかった男』/ 朝食昂『前夜の宴』/ 山岡優作『豊臣最後の家老・片桐且元の忠義』/ 丹羽志朗『密命(『忍冬』シリーズ第二話)』/ 霧山文三郎『大御所暗殺』
【特別掲載】有沙明生『大自然の贈物』

受賞の言葉「茶話歴談」編集長 丹羽志朗

このたびは全国同人雑誌の新人賞をありがとうございます。数多の同人誌やその道の先達から学んだことを生かし、会員の「創作意欲」を高めようと開始したのが「茶話歴談」の刊行でした。

歴史・時代小説系専門の同人文芸誌は全国的にも珍しいようです。どうすれば、このジャンルを愛好する読者に巡り合えるのか、会を発足させて以来の六年間、様々な試行錯誤を続けてまいりました。

例えばSNSを駆使した宣伝活動では、新しい号を発刊した直後、モニターの読者を募集し、先着数名の方に次号を贈呈する企画を試みました。この企画では全国各地に数名の愛読者を獲得できましたし、さらに会員の通勤途中にある書店に委託し、随時読者が手に取って読んでもらえる環境を整え、実物販売にも販路を広げるなどしました。また、会員の住む関東や東北でも、近隣の場所でも「文学フリマ」が開催されるたびに、積極的に販売ブースを確保して参加しました。

しかし、どの方法を通じてでも言えることは、やはり面白い作品を今後も本誌に掲載し続けるということ、その一点だけと考えております。今、思いがけずこうした栄誉ある賞をいただき、どれほど大きな励みになることか一同たいへん喜んでおります。



都度、何のために同人誌を作るのかの原点に立ち戻ってきました。会はその中で六、七年間の歩みを続けてまいりました。会員は三十代から七十代と広い年齢層で構成されています。既・現職を含め、職業も様々ですし、実に多彩で個性的な書き手が揃っています。

会の前身は大阪文学学校の卒業生及び在校生が立ち上げた「歴史小説勉強会」です。歴史への興味や関心があつたことが出発点となり、作品発表の場として同人誌を発刊する者がユニットを組み、そこで誕生したのが私達「茶話歴談」でした。同人誌作りは暗中模索でした。しかし、これまでに十分根を張ってこなかった歴史・時代小説系専門の同人文芸雑誌を発刊しようとの熱い思いが皆にみなぎって

気も失せてしまうと思います。今は第六号編集の真つ只中で、他の同人雑誌に比べればまだまだ浅い歴史ですが、ここまでやって来れたのは、全員が当初からの発刊目的を共有出来てきたからだと言えます。実際、会の立ち上げ時点、あるいは現在においても、様々に意見が分かれたり、議論が起きたりもします。その

いました。

そこで、自らが認めた作品を順番に月例会に提出し、年に一度以上、すべての会員からの批評(合評会)を受けた後、さらにブラッシュアップすることを掲載への必須の条件としました。事前の感想・批評の交流を含め、そうした相互点検のやり方を設立以来ずっと継続しています。今ではそうした方法を「会則」として明文化しました。

読書人口が減る一方の昨今、歴史・時代小説は、読者には一層ハードルが高い分野だと感じています。しかし、読者がいなければ創作する意欲も湧きませんし、作り甲斐もありません。私達は様々な工夫で新たな読者を獲得しようと奮闘してきました。例えば代表的な取り組みとして「相互広告ページ」があります。他の同人誌と広告を載せ合うのです。巻末の二ページほどに、現在では、十団体以上の同人誌の広告をお互いに掲載し合っています。また、SNSでの広報活動やネットショップでの通信販売も展開しています。プレゼント企画、電子書籍化、書店での委託販売などの活動も行いました。おかげで、数社のミニコミ紙や、本協会の交流誌『文芸思潮』第八一号でも取り上げて頂きました。重版を重ね、発行総数が今や二千五百部に達しました。

同人誌にとっては、掲載される作品の面白さは何よりです。コロナ禍の時期以来、顔を合わせての活動が困難な状

況の中、チャットツールを導入し、オンラインの合評会を継続してきました。まだ課題も多々ありますが、試行錯誤の末、創刊号以来、滞ることなく年一回の発行を続けてきております。

最後に、新たな仲間をいつでも募集しています。関西が主流ですが、関東や東北の仲間も参加しています。全国の歴史好きの創作者の皆様、是非、私達の活動にご参加ください。

「茶話歴談」編集長 丹羽志朗

「茶話歴談」編集長 丹羽志朗

〒590・0133

大阪府堺市南区庭代台一・二六・六 峯近誠次方
mail: sawarekidan@lepton-inc.com

